

ペリー艦隊 再来航①

長州藩の命令でペリー来航の情報収集のために、北条源蔵が井上壮太郎とともに江戸藩邸を後にしたのは嘉永六年六月五日のことであった。この日は川崎宿に泊まっている。

四日の夜、江戸を出た吉田松陰は、五日に浦賀へ入っている。

六日は明け方に川崎宿を出て、東海道を上り保土ヶ谷宿の中ほどから浦賀道へ入り、金沢八景を詠った能見堂を通り、野島から船で横須賀へ来て、川越藩の大津陣屋前を通り、東浦賀の旅館徳田屋に到着したのは夕方であった。徳田屋には三十名ほどの兵学者や蘭学者、砲術家、剣術家などの同宿者がおり、みな目的は同じであった。

この日の北条の記述を『新横須賀市史』（通史編）は「川崎宿から保土ヶ谷宿、同宿から尾州廻船に便乗して能見

堂へ至った。ここで北条源蔵は尾州廻船の船乗りから観音崎沖に異国船が停泊している話を聞いた」と記している。

保土ヶ谷宿からどのようなようにしたら尾州廻船に便乗できるのだろうか。またその船が山の上の能見堂へどうしたら着船できるのであるか。日記を忠実に描写することはよいことであるが、「尾州船乗之者江都より浦賀に至る有、相伴ふて能見堂に至る」としか記述されていない、上記のような書き間違いは、市史だからこそ絶対にあつてはならぬことであるし、執筆者の研究者としての姿勢も疑われる。

七日は徳田屋から東浦賀の山伝いに鴨居村に出て、鳥ヶ崎からペリー艦隊が観音崎沖、亀ヶ崎、鳥ヶ崎、灯明堂沖に一隻ずつ停泊していることを確認している。このあと浦賀奉行所の同心の斎藤壮之進に面会して、江戸番町の斎藤新太郎から添書を渡している。新太郎と壮之進がどのような間柄であったのかわかっていないし、それを長州藩の使者に頼むこのいきさつも定かでない。ただ北条は壮之進を「慎み深く人情に厚い人柄で、妻子まで出てきて、旧知の間柄のようである」と評している。壮

之進からペリー艦隊の来航時の奉行所の船を寄せ付けない状態であったことや国書を持参していて、奉行が受け取らなければ、江戸へ乗り込むことも辞さない状況であることを聞いた。

八日の朝、吉田と加賀藩士の泉澤弥太郎を訪ね、松陰を誘って彦根藩が警備していた千代が崎台場の見学をし、これが浦賀港の要地であることを確かめた。この後一人で三崎にまで出向いた。途中の箒山台場の見学をし、彦根藩の陣屋がある上宮田に寄り、ここで火を求めて入った漁師の家で老婆がもう五日間も男衆の手をとられ、貯えもないから飢餓を待つ状態になってきており、異船は実に悪い奴と涙した。三浦半島の村の実情をみている。

この後大浦山台場を視察して、毘沙門、宮川を通って三崎に到着。ここで泊まりかと思ったら、浦賀まで戻ってきている。なんとという健脚であろうか。

九日は久里浜へペリーが上陸するので、これを同宿であった水戸藩の糸井孝次郎らと見学しようとしたが、警備が厳しく久里浜の地へ近付けない。大分遠回りをして、何とか上陸の様子を見ることができた。

北条も海兵隊の隊列を整えた行進に「実に観者をして

目を驚かしむ」と記している。

北条の記した「日記」には、吉田松陰が佐久間象山らと異国船へ幕府（浦賀奉行所）の対応や沿岸警備のあり方、これからの進め方等の大議論が行われたことは記されていない。この議論が行われたことを記しているのは、松陰が兄・杉梅太郎に宛てた手紙のみであり、その会場がどこであったのか、佐久間が懇意にしていた小泉屋（浦賀のどこにあったのかは不明）であるのか、松陰が宿泊した宿、松陰は徳田屋には宿泊していないことは、八日の北条の日記に「卯の中刻（午前六時ころ） 吉田寅二郎加州藩泉澤弥太郎を訪ふ」と記されていることでわかる。

浦賀では通説になっている松陰と佐久間はどこであったのだろうか。なお、北条の『浦賀行日記』は『開国史研究』七号に翻刻されている。